ガザでの母子保健活動

パレスチナ子どものキャンペーンでは、ガザ地区で乳幼児への栄養支援を2014年から開始しましたが、2020年5月からは三カ所の診療所で子どもだけでなく妊産婦への支援を開始しています。ガザも深刻な経済状況とコロナ拡大で苦しむ中、ダラジ診療所で働く看護師と心理士から話を聞きました。

ダラジ診療所付近

看護師 ヒダヤさん

――貧困、栄養不良、ストレス

ダラジ地区はガザ市の東側にあって、イスラエルとの境界にも近く、2014年のイスラエル軍の侵攻では大きな被害を受け、全住民が学校などに避難しました。住民は古くからここに住んでいた難民ではない人たちです。また大変密集した地域で、大家族が一つの家に住んでいます。2007年以前はイスラエルに出稼ぎに出ていた人が多く、その後は建築現場で働いたり市場で野菜を売っていました。ほとんどの人が今回のコロナ禍で職を失い、貧困ライン以下で暮らしています。

夫たちは仕事がなく無収入のため、家族は知り合いや慈善団体から食料や日用品をもらって生活しています。難民ではない人は国連からの支援がないだけでなく、ガザ政府からの支援もなく、数か月に1回カタール政府からの100ドルの支援が唯一の収入です。ロックダウンが解除され日雇いの仕事がある時も1日に10シェケル（約300円）しかもらえないので、パンと水しか買えません。ガザは1日に8時間しか電気が来ないのですが、冬の間はそれが5時間になります。でもこの地区は貧しいので、電気をためる蓄電装置を買うことができず、灯油やプロパンも買えないので、重ね着をするか焚火をして寒さをしのぐ人がほとんどです。

検診

栄養指導

ガザでは1歳未満の75%が栄養失調、乳幼児の60%がビタミン欠乏、72%が貧血状態です。生後8か月のナビールという男の子は、重度の栄養不良と貧血でした。ヘモグロビン値が7gしかなかったのです。お母さんは19歳。母乳で育てていましたが、子育てのやり方がわからず、またうつ状態でした。このため診療所で栄養指導をしました。子どもの世話のやり方、栄養のある食事の作り方を学びました。ナビールにはビタミン剤や鉄剤などを提供しました。いまも家庭訪問を継続しています。11人家族が1つの家に住んでいて、ナビールと両親は一間で暮らしています。母親の心理状態は経済状況に大きく影響されているほか、息抜きをする場所がありません。

5か月たってナビールはいま1歳になり、ヘモグロビン値も11.2gになりました。母親の心理状態も改善しました。この地区では母親たちは若く、また育児の知識がほとんどありません。その多くは高校を出ておらず、またスマホを持っていないため、インターネットの情報を得ることも難しいのです。そのため診療所に直接来てもらって話をし、薬を渡します。用事があるときは夫に電話して、妻に代わってもらいます。交通費が払えず診療所まで30分歩かないとならないので、来るのをためらう人もいます。

――新型コロナ

感染が広がる中で、スタッフはマスクだけでなく防護服やフェイスシールドなどをつけ、決められた手順を守っていますが、来訪者がマスクをしてくれないことが大きな悩みです。日々の糧に事欠く人たちはマスクを買う余裕がないのです。また、この地区には他に保健施設がなく、たくさんの人が来るため人数制限をしないとなりません。以前は、産前検診や乳幼児の定期検診に毎日200人ほど来ていましたが、感染がひどかった時期は25人までに制限し、いまは60人ずつの予約制にしています。

感染状況を見ながら、保護者への栄養改善のワークショップを今後増やすことを考えています。貧血や栄養不良の子どもたちに何を食べさせたらよいかを知りたいと、母親たちが非常に関心を持っているからです。また、電話によるカウンセリングを行っています。専用の無料ホットラインを開設し、妊婦や出産後の母親、乳児の状態が心配な時には相談に乗っています。相談のために診療所に来る必要がなくなり、定期健診や薬が必要な時だけで済むからです。

心理士 ボドゥールさん

――子どもの7割にも怒りが

私はこの診療所で10年働いています。この地域の人たちは怒りを感じ、気分が沈んでいます。主な理由は貧困ライン以下の生活という経済的な問題です。母親だけでなく子どもたちも怒りを感じていて幸せではないのです。多動、いつも不機嫌、「おねしょ」などの特徴が見えます。学校の成績もとても悪いです。こうした子どもたちに心理カウンセリングをすると同時に母親たちにもカウンセリングをします。

コロナ以前は5歳から18歳の子どもたちに世代ごとのワークショップを毎月行って、ゲームやダンス、描画などを通して自らを表現し、怒りをコントロールし、ネガティブなエネルギーを減らすことを助けてきましたが、いまはこうした活動を中止せざるを得ません。そのため、子どもの心理状況に影響が出ています。年間150人くらいの子どもに個別のカウンセリングをしています。子どもが10人いるとしたら、7~8人は心理サポートが必要です。その人数は毎年増え続けています。

なぜロックダウンになるか、学校が閉鎖になるか、子どもたちには理解が難しいです。そして家にずっといることが心理的にも悪影響を及ぼしています。オンライン教育になったものの、停電時に電気を調達する装置はなく、インターネットもスマホもないので、ダラジ地区の子どもたちは学校の勉強にますますついていけなくなっています。

コロナでの問題は対面での心理サポートが出来ないことです。電話で母親や子どものカウンセリングをしていますが、繊細な話をほかの家族に聞かれないようにするのに電話はとても難しいです。離婚率も上がっています。数日前にカウンセリングを受けたいといってきた女性は、夫から暴力を受け、怒りと抑うつを感じていました。夫の家族と同居のため多くの問題を抱えています。しかし離婚をして実家に戻ると、実家の経済状態が困難になるという次の問題も生じます。

私自身はストレスの解消に、ジムでエアロビクスや「ズンバ（ダンスエキササイズ）」をします。今はコロナの影響でジムが閉まっているので、毎日1時間ウォーキングをしています。母親たちにもウォーキングを勧めています。お金がかからずストレスを開放し、ネガティブな感情を減らすので、最も有効だと思う方法です。

お母さんに話を聞きました

ダラジ地区に住む生後11か月の男の子と、15日前に産まれた女の子のお母さん。本人の健康状態は普通だが男の子は貧血で、新生児の女の子には黄疸の症状が出ているため、母乳をやめた。夫は5年前に事故で片手に障がいを負い、子どもを抱くことも難しく、失業している。夫の家族と暮らしている。一家の稼ぎ手だった義兄もコロナで職を失い、いまはユニセフの食料配布で家族11人が暮らしている。「子どもが栄養失調になったのは、私も十分な栄養が取れておらず、その母乳で育ったためだと思います。夫は優しいが、育児には協力してくれず、一人で子育てしています。二人の子どもが夜泣きするため、毎日2時間ほどしか寝ていないし、夜中停電の時に、ミルクの準備をするのも大変です。息が詰まるような気がします。」

ラファでのリハビリ支援

ガザの南部は農村と砂漠が広がり、医療施設も少なく貧しい地域です。障がい者支援を拡大するため、2020年はガザ南部のラファとハンユニス、マガジの三か所で新たなリハビリ施設を開設し、地元に密着した支援を開始しました。今回はラファの活動をスタッフに紹介してもらいました。

ヘバさんとハビバちゃん

リハビリ

理学療法士 ヘバさん

――ラファで初めての開かれたリハビリ施設

ラファはガザ地区の最南部に位置し、ガザのほかの地区よりも貧しく、十分な医療施設がありません。これまでリハビリ施設は国連の診療所しかなかったため、難民以外の人はリハビリを受けられず、難民でも手術後など急性期以外の人は受けることができませんでした。そこで新しいリハビリ施設を開設しました。まずはバリアフリー化など建物の改修、資機材の設置、スタッフの確保と研修から始まりました。以前、私は国連の診療所で働いていたものの、施設の立ち上げは初めてで本当に大変な作業でした。CCPのチームと一緒にゼロから始めて、ほかにない設備も備え、とても達成感があります。

3か月間の治療計画と達成目標を立てて、集中的に治療を行うため、目に見える成果も出て患者さんもとても喜んでいます。1歳のハビバちゃん（女）は、ハイハイもできず、また一人で座ることもできなかったのですが、今ではハイハイできるようになり、一人座りもでき、音楽に合わせて体を動かせるようになりました。彼女がクリニックに来るとその明るさにスタッフも元気づけられます。6歳のサルマちゃん

（女）は脳性麻痺のため、つま先立ちでしか歩けなかったのですが、下肢のリハビリを繰り返してほぼ普通に歩けるようになりました。地元住民は元々、「リハビリをしても無駄だ」という偏見を持っていたのですが、今では「うちの子にも受診させたい」と電話が鳴りやみません。

コロナ感染が広がった最初の時期は非常に大変でした。対面リハビリができず、介助する家族に向けたビデオや写真の準備、オンラインでの指導に追われました。またスタッフ自身も恐怖に駆られましたが、いまではしっかりと予防策を講じて不安も減りました。

ロックダウンや経済状況から、住民の心理状況は最悪です。私自身も時にはストレスを感じますが、ヨガでリラックスしています。ガザに来たスペイン人のヨガトレーナーから教わりました。私もヨガトレーナーの資格を取り、ほかの理学療法士にヨガを使った療法を教えています。子どもも大人も、不安感や筋肉拘縮に対してとても有効だと感じています。

――当事者同士の支えあい

心理士 アブダッラーさん

ラファは国境に近く、2014年のイスラエルの軍事侵攻以降、落ち着いた時期がなく過ごしています。それが社会生活にも心理状態にも響いているのです。

私の診ている中で最も深刻なケースは17歳の少年です。娘6人の後に「ようやくできた男の子」というので、父親の期待が大きすぎてありとあらゆることに口出しをされたため、少年は自己を形成できずに学校からドロップアウトし、父親の干渉から逃げたいと自殺願望を持ちました。そして国境近くに出かけて騒動に巻き込まれ足を負傷して障害となり、杖なしでは歩けなくなりました。ところが父親は反省するどころか、「そんな子どもはいらない」と無視するようになったのです。1か月半ほどカウンセリングをしていますが、まだ自殺願望が消えていません。父親に対する支援も行っていますが、こちらも時間がかかりそうです。父親も職を失い借金を背負っているからです。

唯一の救いは、少年が週2回リハビリに通っているほかに、週2日「ピアサポート」にも参加していることです。ピアサポートでは性別や年代、あるいは障がいの程度によってグループを作り、障がいのある人たちが集まって経験や悩みを共有します。少年はここで友達ができ、悩みを語り合えるようになっていますが、まだ予断を許せないので、カウンセリングも続けています。ピアサポートにはこれまで86人が参加し、よい効果を上げています。各グループの参加者たちは「ワッツアップ（「ライン」に似たインターネットアプリ）グループ」でつながりあい、お互いに支え合っています。そのうちに私たちがいなくても、お互いに助け合えるようになると思います。

診療所では、子どもに理学療法を行うとともに、母親に対する心理サポートも始めました。ストレス解消のリラクゼーションのほか、障害のある子どものいる母親たちのピアサポートグループでは、先輩たちの経験を聞いたり、成長し学校に行っている子どもたちの様子を見てもらい、障がいのある子どもを受け入れられるようにしています。

ピアサポート

希望をつくり出す力を

若い世代の障がい者に話を聞きました。

社会参加を促進するために、障がい者の職業訓練を、実績のあるアトファルナろう学校の協力を得て継続しています。グラフィックデザインのコースに参加している2人に話を聞きました。二人とも乳児の時から障がいがあり、大変な苦労をしながら大学も卒業していますが、ガザの経済状態の中では職が得られず、このコースに参加することで技術を得たいと考えています。

ユーチューバーのイスラムさん（30歳）

「生後40日の時に高熱を発して、それ以降手足がマヒしました。家の隣に小学校があったので通学することができ、また学校が配慮してくれて教室はいつも1階にしてくれました。ガザでは珍しいことです。兄たちのコンピューターが家にあったので、10歳くらいからコンピューターには触ってきました。ユーチューブやフェイスブックもやっています。

家はシジャイヤという地域にあり、ここまで来るのに毎日30分かけてタクシー（交通費は事業で負担している）で来ます。運転手さんが入口まで介助してくれます。シジャイヤは2014年の戦争ではイスラエル兵が地上侵攻したところで、その時のことは悪夢でした。家は安全ではなかったので、1か月以上転々と逃げまどいましたが、上の兄が私を背負い、寝たきりで意識不明の母を下の兄が背負いました。日々の

若い世代の障がい者に話を聞きました。

介助は姉や継母が助けてくれています。

この2か月間で「プレミア」「フォトショップ」「アフターエフェクト」などの画像や映像を編集するソフトの使い方やビデオ制作を学び、これから印刷会社でインターンに参加します。こうした経験を生かし、フリーランスで仕事ができるようになりたいと考えています。」

＊　＊　＊

「語り部」のモハンマドさん（34歳）

「出生時に酸素欠乏になり、マヒが手足にあります。日常生活はすべて母親に介助してもらいます。手にもマヒがあるのですが、ゆっくりならパソコン操作は問題ありません。小学校は地元NGOの障がい児支援学校に行きました。そこで自尊心と自立心を学びました。中学からは公立です。イスラムさんと違って、教室が2階の時もありましたが、友達に助けてもらいました。僕は社交的ですぐ誰とでも友達になれるからです。黒板を写すのも、友達に助けてもらいました。大学では経営学を学びました。バスや乗り合いタクシーを使えないので4年間毎日契約したタクシーに送り迎えしてもらいました。本当に大変でした。大学を出たけれど就職できません。そこで全く新しい分野でしたが、グラフィックデザインに挑戦しています。戦争の時は僕の家も大変でした。両隣りの家は爆撃でぺしゃんこになり、僕の家も窓や壁、屋根が壊れました。

職業訓練では、改めて職業人としての責任や信頼を得るための技能を学んでいます。ソフトも面白いし、この後インターンが楽しみです。僕は家にはパソコンがありませんので、スマホを使ってSNSをいろいろとしています。ユーチューブを始めたいと思っています。

2011年から、200近い学校を回って「障がい者問題」の啓発活動をしています。たぶん2万人にお話をしたと思います。障がい児の両親などの相談にも乗っています。学校でお話すると、講演の後、障がい児の兄弟がいる子どもたちが私の所に来て、彼らの質問に答えることもしょっちゅうです。インタビューもたくさん受けました。しかしコロナの影響で今はすべてストップしています。とても残念ですね。」

パレスチナやレバノンでは、生き延びるために人々が苦闘しています。そんな中でも、子どもたちの生命力や、障がいがありながら希望を失わない人たちの力に勇気づけられます。日本も先が見えず暗いニュースが多い毎日ですが、みんなで支えあいながら、この時期を乗り越えましょう。皆様、健康第一でお過ごしください。

パレスチナ子どものキャンペーンご案内

パレスチナ子どものキャンペーンは	1986年に活動を開始した市民のNGOです。国籍や宗教、民族にとらわれず、パレスチナと中東地域の平和を願い、そこに生きる子どもたちが希望を持って成長できるように、教育・保健・福祉分野での支援と人権擁護を進めています。また、コミュニティの強化と自立的発展に協力しています。
会員になってキャンペーンの活動を支えてください	●会費（年会費）：4,000円、6,000円、10,000円（※ご都合にあわせて、金額をお決めいただきます） ●会報「サラーム」や随時のお知らせなどをお送りします。詳しくはお問い合わせ下さい。
ご寄付をお願いします	ご寄付・募金を常時受付しております。下記の口座にお振込みください。 郵便振替口座［00160-7-177367］／みずほ銀行 高田馬場支店［普通8030448］ 三井住友銀行 目白支店［普通6852351］／三菱UFJ銀行 目白支店［普通0152056］ 銀行からの送金の場合は、領収書をお出しするために、ご住所とお名前をメールやファックスなどでお知らせ下さい。会費のお振込みも上記の口座をご利用下さい。 クレジットカードでもご寄付いただけます。詳しくはホームページ https://ccp-ngo.jp/ をご覧下さい。
税金の控除について	パレスチナ子どものキャンペーンは寄付金の税金控除を受けられる認定NPO法人です。税金控除には、当会発行の領収書をつけて確定申告をして下さい。

特定非営利活動法人 **パレスチナ子どものキャンペーン**（認定NPO法人）
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-23 豊ビル4階／Tel 03-3953-1393／Fax 03-3953-1394
Eメール info@ccp-ngo.jp／ホームページ https://ccp-ngo.jp/
Facebook パレスチナ子どものキャンペーンnew／Twitter @ccp-ngo

パレスチナ子どものキャンペーン